

2018年
5月29日
火曜日

本郷 亮 教授（経済学史）

直木賞作品のススメ

どちらも1935年に始まった「芥川賞」と「直木賞」は、日本の代表的な文学賞として広く知られており、前者は芸術重視の短編の純文学を、後者は娯楽重視の中・長編の大衆文学を、それぞれ対象としている。かつて私のゼミでは「芥川賞作品」に表れた政治・経済・社会思想1935～2000」という壮大な

テーマを掲げ、ゼミ生全員で当該期間の全作品を手分けして読み、（経済学部や社会学部など）社会科学系の学生の興味を惹きそうな作品を洗い出したことがある。

とりわけ歴史的アプローチの研究では、そのテーマに関わる古典的「小説」を読めば、教科書や専門論文等では得られないその時代状況のいきいきとしたイメージを、感性を通じて得ることができる。例えば英国19世紀の救貧法行政を学ぶさいは、救貧院に収容された孤児の生涯を描く、

文豪ディケインズの『オリヴァー・トゥイスト』（1838年）を一読することは有益だ、と考える研究者も多いだろう。

さて話を戻すと、芥川賞作品は「純文学」なので、直木賞に比べると、経済などの思想や世相を反映しにくいのだが、それは百も承知の上で、私のゼミでは芥川賞作品を研究対象に選んだのである。なぜなら芥川賞作品はどれも「短編」なので、数時間で読破可能だが、直木賞作品は文庫本にして300～400ページのサイズが普通なので、読むのに数日かかる。つまり、前述のような問題意識の場合、研究対象としては直木賞作品の方が適しているのは一見して明らかなのだが、それでは読書量が膨大になってしまうため、やむなく芥川賞作品を対象としたわけである。

しかし、直木賞作品で同様の調査をやりたいという思いを、私は今も

失っていない。だからそれらをコツコツ読み進めている。お薦めのものを幾つか挙げれば、前述のような問題意識からは、①ちよっと古いが、城山三郎『総会屋錦城』（1958年下半期受賞）。②同じ会社に勤める5人の女性のそれぞれ異なる生き方を描く、篠田節子『私たちのジハード』（1997年上半期）。③ある在日朝鮮人の少年の生活・心理を描く、金城一紀『GO』（2000年上半期）。④中小企業の意地を描く、池井戸潤『下町ロケット』（2011年上半期）。⑤就活生たちの心理を描く、朝井リョウ『何者』（2012年下半期）。

また、純粋に娯乐的・個人的観点から面白かったのは、⑥戦国時代の瀬戸内海の村上水軍を描く、白石一郎『海狼伝』（1987年上半期）、⑦江戸の遊郭・吉原のガイドブック、松井今朝子『吉原手引草』

（2007年上半期）。⑧千利休の茶の美意識を探る、山本兼一『利休にたずねよ』（2008年下半期）。⑨大正～昭和初期の秋田のマタギ（鉄砲猟師）の半生を描く、熊谷達也『邂逅の森』（2004年上半期）。とりわけ⑨は抜群にカッコよく、私

が狩猟（むろん各種免許等が必要）を始めるきっかけになった。直木賞作品は基本的にどれもベストセラーなので、面白くて当たり前。映画化されていることも多いので、映画を見ることが多いのもある。私は小説を読みながら、電子辞書やグーグル・マップで色々と気になった事柄を調べたりするの

が、とても好きだ。直木賞作品に限った話ではないが、私のこれまでの人生で、文学から得たものはずいぶん多い。